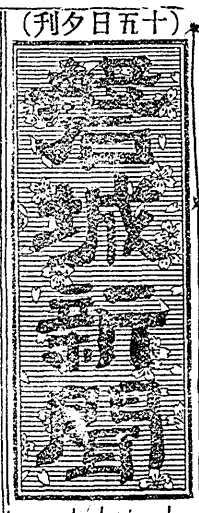
（十五日夕刊）



休刊　大祭　第一・第三日曜
定價　一ケ月　二錢　郵税　六十錢　十五錢
廣告料　壹行六十錢　指定廿錢
発行兼編集人　福島縣平町田町十六番地　藤沼館輔
發行所　聲城新聞社　電話五六四番

劇評と云ふもの〔下〕

岩垂保美

で、外國では何うだらうと文名嘖々たる詩人であるが、散文で物されたこの戯演出だとか、監督だとか効曲を味はふて驚きを覺ねるは居られなかつた。豪詞果（これは劇中音響學のこと、とへば風の音、汽笛等。ラ故小南内藤氏の譯語を簡素さ、調子の的確さ、ヂオドラマはこれと雖一言霧囲気の眞實さ、はなはだ葉で出來たもの）とかいふ（原則として）劇場の手一ものが發達した外國の劇評ぐれた價値を持つたものは何うだらう。戯曲が直接で あつた。極短の三の場面の中に（確かに十二分かも五分位の繼續しか持つてゐない）ヴイルドラック氏は若い印刷職工の憂鬱なアパンチウルを物語つてゐる。名はセガアルといふ。

彼は戰爭が終るやいなや最う一人の「お仲間バスチアンと一財産起すために亞商船テナシチイに乘つて船出をする前にハアブルのさやかなキャバレエにおみしをする。セガアルとバスチアンは其所に八日かも日過ごすことになる（汽船の鐵が直るまで）そしてと十日の間に二人共がこの小さな旅籠屋のテレエズメしてやつてゐたところ。現いふ女中に打込んでしまうかその打込み方はたの〜在はシネマハウスになつてゐる）昨日　出し物を、甚だ文學的素質に富んだ出し物を呈供してくれた。

シャルル・ヴイルドラック氏のものである。氏はメルキウル・ドフランス誌上の晩の劇評で筆者は有名な劇作家セエ。で……

（ヴイユ、コロンビエ座の譯註有名なヂャック、コポオが俳優として演出家としてやつてゐたところ。現在はシネマハウスになつてゐる）昨日　出し物を、甚だ文學的素質に富んだ出し物を呈供してくれた。

シャルル・ヴイルドラック氏のものである。氏はメルキウル・ドフランス誌上で文名嘖々たる詩人であるが、散文で物されたこの戯曲を味はふて驚きを覺ねるは居られなかつた。豪詞簡素さ、調子の的確さ、はなはだ霧囲気の眞實さ、はなはだぐれた價値を持つたものであつた。極短の三の場面の中に（確かに十二分かも五分位の繼續しか持つてゐない）ヴイルドラック氏は若い印刷職工の憂鬱なアパンチウルを物語つてゐる。名はセガアルといふ。

彼は戰爭が終るやいなや最う一人の「お仲間バスチアンと一財産起すために亞商船テナシチイに乘つて船出をする前にハアブルのさやかなキャバレエにおみしをする。セガアルとバスチアンは其所に八日かも日過ごすことになる（汽船の鐵が直るまで）そしてと十日の間に二人共がこの小さな旅籠屋のテレエズメしてやつてゐたところ。現いふ女中に打込んでしまうかその打込み方はたの〜在はシネマハウスになつてゐる）昨日　出し物を、甚だ文學的素質に富んだ出し物を呈供してくれた。

シャルル・ヴイルドラック氏のものである。氏はメルキウル・ドフランス誌上

平町南町
上田醫院
電話一二九番

私のそばにゐた人々は云つてゐた（是は生活の一の枝である）と。

或る點からすれば此の「バツケボ・テナシチイ」にむかしのテアアトル・リイブルを復起させるものを持つてゐる。それにもかゝはらず此の作品は感情的な胸に迫る喚起的な物優しさを持つた言葉を集めるのに素晴らしい手腕を持つた劇詩人の手になつたものである。そして吾々をして（一

平町南町
上田醫院
電話一二九番

春の日の漫誌

閑文字　詩人

また春が來た。日誌に幾度せか書きつけて來しまた春が來た。十四で進水式を擧げたといふ妓の述懷――當時四十の旦的は、どうしても六、七十の老人と思へてトツテもくやしがつたが今自分がこの年になると四十なんてホンの兄さんだわとテつた言葉を思ひ出す。若いつもりでゐても他人は俺いゝ親鍾と見るにきまつて

春の日誌に幾度の春で中年者には至つて交渉が淡い。

◇

ながし眼で錦紗が妄いと妻はいふ
花信しきり春ふかみゆく。女は飽まで漸定的だ。結婚當時の寫眞から自分を見出たしてどこの娘かゝ驚く年でのながらもやつ

平町田町
高久病院
電話五一三番

平町紺屋町
藤沼醫院
電話五〇七番

廣告

吉田眼科醫院

幕末奇談高野長英九郎
（112）
中西洋々作
布施長彦畫
講談

十七といへば、最早女の花盛りです。殊に現代のそれとは違つて封建時代のお性格は女とし云へば妻として他家へ入る爲にのみ教育されてゐたものですから、さうした方面にも彼女らの成育は、甚だ早くありました。

讀者の記憶にもあるようにに、彦九郎に人間としての道をときかせた、邪道の

「お光ちゃん。お前は何といふ人非人だ。叔父さんが死んで行くところもなく可哀さうだから、わしから無理にたのんで甚作さんにひきとつてもらつたんだのにあらうことか、あるまいことか、その甚作と不義を働くなんて、えいつ！くやしい、わたしのこの胸をなんとしてくれるんだ。人非人畜生。恩知らず」

おとせは、佐吉の妹の子つまりお光とは從姉妹同志で血につながる身でしたが女心のあさましくもお光と夫甚作の間にあらぬ疑の目を向けて亂れたる心は嫉妬の風に荒れすさぶのでした

「人非人、畜生」

この罵りの聲は、お光の十六の頃から既に彼女の上に投げかけられました。それ以日を經るに從つてますます頻繁につひには毎日のことの樣になつてしまひました。

「お光、お光ちゃん」

その日も外から歸つて來たおとせは、ふとお光の姿の見ないのを知ると、かつと逆上してその名を頻に呼びました

「お光ちゃん、お光ちゃん」

廣くもない家をあちこちと探しまはりましたが、どこにも彼女のそれらしい姿は見えません

「さては！」

さう思ふと彼女の血はまた逆にのぼつて行くのです――甚作の野良仕事をしてゐる所へ、出掛けて行つたのだ。

疑へば何とでも疑へるものゝ、おとせは突嗟にさうと考へると前後の思慮もなく家をとび出して、甚作の通てゐる野良の方へ狂氣したのやうになつて駆出しました。

「……甚作さん」

「……お、お光か」

「――會ひたうムんした」

「……うゝむ。わしもあひかつた。どうも同じ家住んで居るのでも、たとせ居るのではまるで千里もはなれてゐるような氣がして喃」

かうした囁きを交しあつて互に抱きあつてゐる樣が手にとるようにあり〳〵と見え聞わて參ります。

「畜生！」

彼女の血はまだ怪しく狂ふのでした

俳句

高萩院花祭奉燈　平町　いわほ
花御堂中に佛の立たせけり
善男女の奉仕になりぬ花御堂　同　溪風
御佛の頂によゝと產湯哉
子等集ふ高萩院や花祭　福島炭礦君代女
花祭り香炷く煙り鐘の音
花御堂に五三の童園繞せる　同　巍嶽
灌佛にさゞめく寺の内外かな
灌佛や老の背を延す腰の弓　小川郷　超堂
甘茶酌む子の爭ひぬ我れ勝ちに
紅黄白紫きらびやかなり花御堂　同　松甫
落花片々甘茶の中に浮びたる
灌佛のめでたく迫る暮色かな　同　獨歩
日本の櫻に蓮ひり佛生會
日東の無疑樹下し灌佛ぎ

愈々今晩から
合試闘拳と道柔
（晴雨に拘はず午後五時開場）

於　聚樂館

貸切自動車の御用命は
昭和タクシーへ
高級車で乘心地の好い
昭和タクシー
平驛前
電話は
三四三番

御料理
本場　老海勢伊
立献御
ラブスターフライ
ラブスターバリージャン
ラブスターアメリカン
ラブスターテルミドル
其他ソセージ各種
平町田町
一の井
電一六七

江戸前料理
食堂
御試食なりましたか
一度おためし下さい……
錦水の鳥料理
純日本料理
出前は迅速
錦水
平町田町末廣東隣
電話四二八〇三番

新築落成
耳鼻、咽喉科
氣管食道科（專門）
平町南町（舊診療所向電一七〇番）
大和田醫院
大和田郡司
自炊の便あり

外科一般（入院隨意）
内臓外科專門
花柳病科
平町六丁目（橋際）
木村外科醫院
電話三〇九

新入學期と時計
時計は大谷
器械部戰線異狀なし
優良なる器械で安く
殊に學生は元價提供
平三　大谷時計病院
電話十九番

美味にして強壯の効著大
血をふやし肉を肥やす
滋強第一
スツポン飴
スツポン酒　一圓
スツポンヘモクロビン錠　二圓
スツポン　三圓
平町五丁目角
山野邊藥局

入院隨意（自炊の便あり）
外科專門
X光線科
平町南町
上田外科醫院
電話一二九
增築落成
病室完備

女給の腰に釘づけの妙策

超スピード仕替に警察て回る

平町地方のカフエーの春

春はカフエーから……憶面憂い娘に早変りして昨日はもなくかう宣傳される酒と煙草、今日は酒とすらひ廻喫茶とジャズの時代になつた様になる、この所謂一人て平町を初め小名濱、植田周辺になつた女給の移殖は一湯本、四倉等に入り込んで一ケ月に三回も同じ女給許可來る女給は一ケ月平均五十出願をするものがあるといい名と言はれ四月になつては昨十四日までに二十三名の出願があり受付の警官を慌かした、この多くは肥料の臭を嫌ひ村から

出て來る 土の反逆者

の詳で親も嫁入り前だからといふ始末で百名位の實數着物を造つただけでも儲けものだといふ様な考へから警察當局でもこの取扱ひはゆるしてはゐるが一ケ月ずつ殖んで閉口し女給に本許ちに二ケ月たつうちにデカタンな空氣にそまり眉墨をひき白粉を塗る術の外には洗濯するのも面倒だといふ物

大抵假許可で

始めるが身元調査の上本許可を出さうとする頃にはもう廃業してゐる廃業したと思ふと轉住先から出願する着物を造つたりして三百名位の延人員となり警察當局でもこの取扱ひは殆んど閉口し女給に本許可を出すまで釘づけにする工夫はないかと考究中である

來る

出願

許可

許可

**許可